

# 福島県の外来魚の現状と対策

佐久間 徹（福島県内水面水産試験場）

## 1．湖沼から遡上、流下するコクチバス

コクチバスは 1992 年、福島県の桧原湖ですでに定着していることが確認された。これは長野県と並び、国内で最も早い時期に確認されたものである。

桧原湖、秋元湖では、高水温期にコクチバスが溪流へ遡上し、ヤマメやカジカを捕食していることが確認された。また、秋には当歳魚が湖から流下し、流下のピークは9月中旬であることが確認された。外来魚の生息域の拡散は、人為的な放流に加え生息水域からの流下によっても起きている実態が明らかとなり、外来魚駆除を実施する際には生息水域の最上流部から対策を講じる必要がある。

## 2．湖沼でのコクチバス駆除

福島県が 2003 年度に作成した「ブラックバス駆除マニュアル(湖沼版)」の実証のため、羽鳥湖でコクチバスの駆除事業が実施されている。駆除マニュアルの要点は、春の繁殖期に産卵床で卵を守っている雄親魚を捕獲する繁殖抑制と、秋の活動期に刺し網で捕獲する2つの方法である。

繁殖抑制は、自然の産卵床を探索する他、ブロックを置いて人工産卵場を造成し、そこに産卵させて雄親魚を捕獲する方法が使われている。

刺し網は秋の漁獲効率が高いため、9、10月に集中して実施し、他魚種の混獲を極力防ぐため夜間設置は行わず、午前中に網を仕掛けて午後回収する昼間設置としている。

## 3．河川内で産卵するコクチバス

コクチバスは阿賀川、阿武隈川といった河川内で繁殖に成功し、個体数を大幅に増加させている。産卵床形成の条件として、毎秒 6 cm 以下の流速の弱い場所を選択していた。また、産卵床形成水深は透明度の高い河川では湖沼と同様水深 1 m 程度であったが、濁っている河川では平均 0.5 m と浅く、0.2 m 程度の場所にも多く確認されたことから、濁りと産卵床形成水深に関係があると推察された。

河川版の外来魚駆除マニュアルを 2007 年度に作成し、ホームページで公開している。

（福島内水試ホームページ <http://www.pref.fukushima.jp/naisuimen-shiken/>）

## 4．立木に産卵するオオクチバスの繁殖抑制

通常、バス類は砂礫底に産卵床を掘って産卵するが、田子倉湖では、水没した切り株の断面や木の股の部分、さらには立木の垂直面にまで直接産卵しているのを確認した。砂礫の浅場にはコイ等が多くみられ、急深な場所が多いことから、切り株、立木を利用することで、他魚からの卵の捕食を極力防ぐ新たな繁殖生態を確立して田子倉湖の環境に適応したものと推測された。

この特異な繁殖生態を踏まえ、水位変動への対応及び作業労力の軽減のため、フロートで浮き砕石を用いない人工産卵床について、(独)水産総合研究センターの委託を受けて検討している。

## 5．その他の特定外来生物

### (1)チャネルキャットフィッシュ

2005 年、阿武隈川において、国土交通省福島河川国道事務所の調査で県内初確認された。2008 年の調査では稚魚が確認され、今後、個体数の増加が危惧される。

### (2)ウチダザリガニ

北海道に移植されたウチダザリガニが、1998 年に突然、裏磐梯の小野川湖で確認された。その後、桧原湖、秋元湖でも急速に個体数が増加している。秋元湖の水門直下でも生息を確認しており、コクチバス同様、流下による猪苗代湖への生息域拡大が懸念される。